

巻 頭 言

－ 初心を忘れた科学者達 －

藤永 太一郎

学者というからには基本的な真実を素朴に追及するものでなければならないだろう。したがって学問や教育は時の政治や経済とは無縁であるし、技術の進歩にも大きな影響を受けることはない、のが本質である。最近では研究者は増えたが学者と呼ばれる人は少なくなった。

筆者の日頃尊敬する内田穰吉先生*によれば、「人類は大戦争をしないで普通に働いておれば、いつの時代でも、食料を始め必需物質の多くは余ってくるものである。今日の世の中のトラブルは、このところ大戦争がないゆえの生産過剰が基本的な原因なのである。しかし、多くの人はその事実気付かないし、また資本は、わざと気付かせないようにしている。」ということになる。

解説は要らないと思うが、アメリカが米の剩っている日本に米を買えというのも、大陸開拓の必要からアメリカ人が発明した自動車を日本が大量に彼の地に売らねばならぬのも、そのせいである。湾岸戦争も、元を言えばクエートが最新技術によって石油を安価に大量生産し、イラクが困ったからである。従来わが国で美德とされた勤勉さがいま、世界中から嫌われているのは、上に述べた経済学上の真実に目を覆っているからにはほかならない。

自然科学の領域でも同様で、筆者の見解では、20世紀は科学が驚くべき進歩をした、との世論には、にわかには賛成し難い。むしろ前世紀末までは真実の探究が学問研究の主体であったので、原子構造論、量子力学、相対性理論といった現代科学の進歩の極致に達したのであったが、その後の90年は応用技術の進歩こそ目覚ましかつたが、革新的新真実の発見は絶えてなかったよう思えてならない。企業家や政治家が、20世紀は驚くべき科学進歩の時代だと宣伝して景気をあおり、学生たちの尻をたたくのは止むを得ないとしても、多くの学者まで技術の進歩を科学の進歩とすりかえた宣伝に乗せられているのを見るのは情けない。

医学者が、当人の心臓病を治すよう手段を尽くすのであれば、素朴に医学であると理解できても、部品交換で済まそうとするのでは医学である筈がないのではないか。仮に許されるとしても真の治療を最終目標とし、移植を過渡的な止むを得ぬ次善三善の仮の手段に過ぎない

*内田穰吉先生 元奈良県立短期大学長、経済学者（日本学術会議第3部長） 奈良市在住

と、医学者を含めすべての人が考えているのだろうか。移植が当然最終最良の医療方法とさえみんなが考え始めているよう思えてならない。 学問の退歩というべきである。

科学はヒトという生物の特異的な進化手段である。 したがってヒトの幸福は基本的に学問をすることにある。 —このことも悟っていない人がある— ただし、同時に生物である以上、生きるための勤労が必要であるが、とって食料その他の物資が余った上に更に豊かになればなるほど幸福になれるわけでない。 こんな基本的なことが、科学者をも含む現代人に、ほとんど忘れられてしまっていることは、誠に情けないことである。

最近、東欧と総称される諸国が政変した。このことを自由主義経済の勝利、社会主義の敗退と多くが理解しているのは早計であろう。何故なら、また近い将来に、その自由市場主義経済の破綻が来るだろうからである。今回勝利したとされる日本を含む西欧側では、石炭・石油その他ウランや金属鉱物資源の乱掘、熱帯樹林、海洋生物の乱獲といった、資源の枯渇と環境破壊が、とめどもなく進んでおり、それにも拘らず、他方で飢餓人口は増加を続けている。 これでは早晚破綻せざるを得ないではないか。 筆者は、専門の経済学者でも社会主義者でもないが、理学者として単純に計算しても収支の均衡が合っていないからである。

基本的には、生物としての欲望の充足を人類全体に保証しなければならず、それが実現した暁に、平和によって生じる余暇は知的生産に費やすことによって、初めて、ヒトの知的進化の理想世界が実現することになると思われる。 このことこそ科学者の任務であり、学者の初心にほかならない。 先の湾岸戦争は今回も遂にヒトの進化に何の発展もなかったことを教えてくれたに過ぎない。 来世紀に期待するのみである。

学びて時にこれを習う。 亦悦ばしからずや。(論語)

科学者は実益のために研究するのではない。 自然に愉悦を感じればこそ、これを研究するのであり、また、自然が美しければこそ、愉悦を感じるのである。(ポアンカレ)